感想

見つかるまで

四年　かなめ

何々イズムと言つて、まるでイズムでなければ、世界のことは解決出來ないかの樣に、イズム〳〵とやかましい現代である。

イズム！イズムもよからう。然し何々主義といへば、少くとも一方面に屬した、せばめられた、ほんの一面觀に過ぎないものではなからうか。願はくはもつと〳〵廣い清濁合せ飲むといつたやうな大い考へから、悠然として世に處し、役にも立たぬ理屈ばかりをこねまはさないで丁度佛敎の禪のやうに、此頃はやる靜座法のやうに、具体的の立場からはいつて品性の陶冶、人格の修養を自然の内に体得するやうにしたらよくはないか、等と思つた時代もあつた。そしてその頃は、深く考へもせず、思ひもせず、ぶらりとして暮してゐたものであつた。而も之をよいことゝしてゐた。

かうして二年三年と立つて來たが、そのうちどうしたものか、云ひしれぬ不安と不滿と淋しさとを、心の底に感じ始めた。そして丁度、渺々たる蒼海にたゞよふ一孤舟の樣な、廣漠たる平原に一人取り殘された幼子のやうな賴りない、そしていら〳〵とした感じが、日增しにつのつて行くばかりであつた。一体私はどうしたのであらう。何を求めてゐるのであらう。何を私は欲してるのであらう。

其後いかめしい敎會堂に、私は幾度か說敎も聞いて見た。けれど、そこには心に觸れる何物もなかつた。手當り次第、倫理書も讀んで見た。然し、心を滿たす何物をも見出し得なかつた。先生のお話もうかゞつて見た。けれど尙、私のいら〳〵した心は、どうすることも出來なかつた。

かうして何物かにあこがれ、何物かを求めて、夜毎々々に心の悶ははげしかつた。

ある日のことであつた。何時も樂しさうな、快い元氣を滿面にみなぎらして居る、そして何處かに犯し難い處のある、二三の友の姿をつく〴〵と見た私は、心からほんとに羨ましい氣持が起つた。どうして

あゝも落着いて居られるのだらうか。どうしてあゝも毀譽褒貶から超越して、いつも滿足さうな樣子で居られるのだらうか。あの權威ある態度は、何處から生れて來るのであらうかと。私はあかず眤と眺めて、心ゆくまで考へて見た。色々の方面から考へて見た。そしてとう〳〵、ある一つのことを歸納した。

主義だ。主義だ。主義がなければやつぱり駄目だ。非凡の人はいざしらず、我々凡人には何といつても、取り守るべき確固たる主義が必要だ。主義がなくてどうして行動が定まらう。主義がなくては、まるで航路を見失つた、船の樣なものではあるまいか。

たとへそれは一面觀であるにもせよ、吉田口も御殿場口も、同じく富士へ登り得るの道ではないか。あゝ主義だ。主義だ。人として行かねばならぬ目的地の一點へ向つて、集つて居る道は勿論一つではない。いくつもあるべきはずだ。そのどれでもよい。自分に一番安全と認められ、確かと思はれた道に突き入つて、せかず、あせらず、迷はず、倦まず、只愛に堅くその一筋をとり守つて進んで行けば、遲かれ早かれ、きつと人生の目的地には、目をつぶつて居ても、行きつけるのではなからうか。

さうだ。主義だ。私は今まで道もない砂漠の中をさまよつてゐたのであつた。今オハシスを辛して見つけた。これからもう一息、私は私の行くべき道を見出さなければならない。

此處まで考へて來た私は、丁度迷子がやつと巡査の手に渡された位の、喜びと安心さとを得たのであつた、が、さて然らば私の行くべき道は、何處だらうかと再び闇に物をさぐる樣な不安と、寂寥の内とに陷るのであつた。

然し今度の暗闇の中からは、必ず何かよい物がつかみ出される樣な心强さと、希望とがあつた。從つて生々した勇氣と、勃々とした努力の感とが、これに伴つてゐた。そしてすぐにもつかみ出される樣な氣がしてゐた。けれど私に取つては只一つしかない、而も最もよかるべき道を見出さうとする、この試みはそんな造作もないものではなかつた。半襟一掛買ふにも、あれかこれかと、よりによつて思はず

も、三十分や一時間と費す私、まして一度行き出したら、決して出直しはしまい、横道には這入るまい變更はしまいと思つて居る。いえ、さうせねばならぬ筈の、買ひ直しも出來ない、かけがへもない、只一つの物を、只一度きめるのであるから、全く私にはむつかしい〳〵困難な仕事なのであつた。心の苦悶は前の時よりも、更に〳〵はげしかつた。殊に私は師範生であると思つた時、又どういふつもりで、どんな考への下に教育事業にたづさはつたなら、よいのであらうかと思つた時、苦痛はいよ〳〵はげしくなり、迷ひはひよ〳〵深くなり、闇から闇へ、一筋の光明を探して歩く私の心は、何の手がゝりもなくて、不遠慮な月日ばかりが、ずんずん立つてゆくのにつれて、いら〳〵しくなつて來た。そしてまるで子供を見失つた母親の様な、いぢ〳〵した心持で、見つかりさうでゐて見つからぬ、今に手に觸れさうでゐて何のこたへもない、やさしさうでむづかしいほんとに雲をつかむ様な探し物の爲に、夜も晝も熱中したのであつた。

勿論私の尋ね物は「とるべき道」であつたのであるが、それには大事な先決問題があつた。「人は何の爲に生れたのだらう、人生の意義は何處にあるのだらう」といふこれである。これがわからなければ人に對する教育主義も、定め得られないわけのものではなからうか。で私は先づこれから探し初めたのであつたが、杖とも提灯とも頼む説教も、倫理書も、教室の講義も、せつかちな私の心をいらつかせるより外には、何の効果もなかつた。ほんとにその時分私は釋迦からもクリストからも見捨てられ、友達からはあざけられ、困りに困つたあげくの果、苦しみのあまりに悶々の狀をもらす先生からは、「そんなあなたの様なぐる〳〵循環する考へでは、話にならない。ある一定の止る處を見出せないか。それを見出さなければ駄目だ」といはれ時には「そんな野狐禪流の考へではいかぬ」すげなく言下に退けられ、たまに親切に聽いて下さる方、導かうと努力して下さる方はあつても、私の眞の心持を理解して、同情して下さる方は一人もなくて、全く頼りない私はつく〳〵、人生の不可解を叫んで大瀑布に身を投じた、藤村操に思ひを寄せずには居られなかつた。けれど

もまだ〳〵生に執着の強かつた私は、不可解な世をがまん出來ない程氣にしながらも、「今に何とかなるだだらう。今に何かつかめるだらう。」と淺間行きも華嚴行きも、今目のまへのことの様に考へはしなかつた。只、人から見れば如何にも馬鹿げた、時には自分でも、ほんとに馬鹿げたことではあるまいか、と思ふことがないでもなかつた、けれどどうしても、頭から取り去ることの出來ない、深い〳〵懷疑に落ちて、落ちたまゝ一年二年と、立つて來たのであつた。

此處の四年生になつた今日、今も尙私には、何の爲に人は生れて來るのか、又、來たのか、それはさつはりわからない。然し私は「人は誰でも空間的に時間的に——その二つが衝突しない限りに於て——出來る丈の發展を遂げ樣とする、欲望を持つて居るものである。どんな人でも欲望の滿足、完欲、といふことを望んで居るものである。」といふことがわかつた。そしてこの欲望を滿足させるには、孤立しては迚も出來るものではない。どうしてても他人からの助けが必要である。助け、助けられせねばならぬものである。即ち人事的交渉は自然の情として、此處にはじまつて來た樣なわけで、家族間の道德も、社會上の秩序も、要求から生れて來たもので、元が正しく行はれない場合には、欲望の滿足も決して遂げられるものではない、といふこともわかつた。

要するに私は今辛うじて、人間はどうしてゆけばよいものであるか、といふことだけがわかつたのである。私の行くべき道、安全な確かな道、それだけを今辛うじて見出すことが、出來たのであつた。

此頃心はやゝ平靜である。

⊙やすりやの小僧　　尋　三

おさないの朝僕が學校にいこうと思つて、家を出ると、やすりやの小僧が、さくらの花を、とつて居ますから、こら、としかると、あたまを、ぺこぺこ、さげてあやまりました。

學校から歸りに僕にしかられた小僧が、僕の顏を見て、あいつだ、あいつだ、とほかの小僧に云ひました。

かとうな人はしかられてもへいきで、人がいなくなるとすぐわるい事をします。